

したまち

まさき 山本 雅基さん(42) 台東・山谷でホスピスを運営



「ドヤ街」の真ん中に 死に向かう安息の地 希望の光を最期に 生きて

多くの日雇い労働者らが集まる台東区山谷地区に、末期がんなどに侵された人たちが心安らかに死を迎えられるためのホスピス「きぼうのいえ」を、二〇〇二年十月に開設した。山谷には、長年家族と連絡を取っていないなど身寄りのない人が多い。

「きぼうのいえ」は、インド・コルカタの貧民街にマザー・テレサが開き、多くの恵まれない人をみとった「死を待つ人の家」の活動を目標としている」と語る。

「きぼうのいえ」は、多くの簡易宿泊所が立ち並び、「ドヤ街」の真ん中に建つ。入居者が住む部屋は四畳半ほどの広さの個室。三十二室のすべてが埋まっている。入居者は末期がんなどで余命少ない人たちが、身寄りのない人や重度の認知症を患っている人が多い。病院などが開設している一般的な「施設ホスピス」では、こうした人たちは受け入れてもらえないから。死を間近にしたが、病室のソリシャルワーカーや福祉事務所から紹介されて入居する。

「施設の運営は、入居者に支給される生活保護費と篤志家からの寄付で成り立っている」と説明する。「六人のスタッフが常勤するほか、介護保険を活用して、近くで活動する医師やヘルパーの往診や訪問介護を受けるなど、地域ぐるみで入居者を支える仕組みをとっている」

「これまで三年間でみとった人の数は、三十六人になる。『希望をなくした人たちに、最期に光を見いだせる場所』とホスピスの設立を決めた。描かれているのは、人生の最期に安住の地を得た、幸福な人たちの姿だけではない。これまでかたくなに世間や他人に心を閉ざして生きてきた入居者との、壮絶な葛藤の記録でもある。

「きぼうのいえ」には補助金は支出されていない。山本さんが「無謀の家」と冗談めかすほど困難な取り組みだが、4階建てのエレベーターを備えた施設はもちろん、入居者への日常的なケアまで、こんなことができるのかと驚かすにはいられない。今年立件された青年実業家ではないが、所有と消費に執着する風潮は強くなるばかり。山本さんは「入居者は愛を学びながら、滑走路をスピードを上げながら走っている」と表現する。空へ飛び立つという死のイメージ。自らの死生観をたまには見つめ直さなければ。(大原 啓介)

取材して

- 1963年 都内で生まれる
- 85年 日航機墜落事故を知り衝撃を受ける。遺族の姿に「悲しみに暮れる人のために生きたい」と決意し、ボランティア活動に入る
- 同年 キリスト教の洗礼を受ける
- 90年 上智大神学部に入學
- 91年 ファミリーハウス設立と運営の活動に参加
- 95年 大学を卒業。民間非営利団体(NPO)「ファミリーハウス運営委員会」の事務局長に就任
- 2001年 ファミリーハウス運動を離れ、ホスピス開設の準備を始める
- 02年 「きぼうのいえ」オープン

▽家族 ホスピス設立に向けた活動中に知り合った妻・美恵さんと2人暮らし。美恵さんは、施設を支えるスタッフの1人。
▽趣味 クラシック音楽の鑑賞。モーツァルトやショパンを聴きながら、入居者とコーヒーを飲むのが楽しみ。